

歌戈魚虞模古讀管見の講義より

吉池孝一

1985年度、慶谷先生ご担当の大学院の授業で唐鉞著「歌戈魚虞模古讀管見」(『國故新探』1966年)を読んだ。そのおりの印象に残った話について紹介をさせていただく。

—

これは唐鉞氏の論文22頁に掲載された第六表を横書きにしたものである。梵文字母の u, ū, o の音訳漢字を年代順に配している。なお、() 内は割注部分、枠の太線は吉池による。

	梵文字母		u	ū	o
譯者	書名	年代			
法顯	大般泥洹經	東晉	憂(短)	憂(長)	烏
曇無讖	大般涅槃經	東晉	郁	優	烏
謝運靈等	大般涅槃經	劉宋	憂(短)	憂(長)	烏
玄奘	一切經音義	唐貞觀	塢(烏古反)	烏	汚
地婆訶羅	大莊嚴經	武周	烏(上聲)	烏	烏
慧琳	一切經音義	唐開元	塢(烏古反, 或作 鄔, 亦通)	汚(塢固反, 引 聲, 牙關不開)	汚(襖固反, 大 開牙, 引聲)

これより唐氏は、模韻の烏は六朝において o であったが、唐初に u に変化したため、それ以降は、梵文字母の u および ū の音訳において、尤屋韻の憂優郁に替えて模韻の烏を用いるようになったとする。なお、ここでは提示しなかったが、論文5頁に、梵音 bo の音訳漢字を年代順に配した第一表がある。この第一表によると、姚秦の鳩摩羅什、唐の玄奘、法成、般若・利言、法月は梵音 bo を模韻の菩で音訳し、唐末の智慧輪と宋の施護は號韻の冒で音訳する。これは模(姥暮)韻が o から u に変化したため、模韻の菩にかえて號韻の冒を使用するようになったことによるとした。以上は模(姥暮)韻の変遷の問題である。

ついで、唐氏は梵音 o と模(姥暮)韻の音価に言及する。近代インド方言のなかに o を「合 o」【[o]】と読むものがあるが、古代の梵音では「開 o」【[ɔ]】で読んだ。そのことは西洋の学者の説を引くまでもなく、梵漢対訳中の次にあげる三つの傍証により知ることができるという。(1) 慧琳一切經音義の o 汚の反切に襖固反とある。反切上字の襖は au または ao であるから、襖固を急呼すると、「開 o」【[ɔ]】となる。(2) 慧琳一切經音義の o 汚の注記に大開牙とあるが、これは「開 o」【[ɔ]】を表わす。「合 o」【[o]】であるならば開牙と表現したはずである。(3) 唐末と宋において梵音 bo の表記に號韻の冒-au を用いたのは、-au が「開 o」【[ɔ]】に近似していたためであり、現代の福州や蘇州方言でも號韻などを「開

o] 【[o]】で発音する¹。以上により、唐氏は梵音のoの音価を「開o】【[o]】とし、それを音訳した六朝の音訳漢字の模（姥暮）韻の音価も「開o】【[o]】であったとする。

二

慧琳の一切経音義卷25、大般涅槃経卷8、次辯文字功德及出生次第の関係する部分をひくと次のとおりである。原文に梵文字母はないが【】で補い提示する。()は割注部分。最後の【】は吉池の参考訳であるが、牙を奥歯とするのは慶谷先生の解釈による。

【u] 汚（塢固反，引聲，牙關不開）【塢固反。長音。奥歯は閉じて開かない。】

【o] 汚（襖固反，大開牙，引聲。雖即重用汚字，其中開合有異）【襖固反。奥歯を大きく開く。長音。汚字を重ねて用いたが、そこには開合の異りがある。】

慶谷先生は、反切上字の塢と襖は下字を予想した使い方であり、上字も韻母に関わっているとしたうえで、この箇所のポイントは、uとoを「合」と「開」の対立として理解するところにあるとした。唐氏は大開牙を「開o】【[o]】を表現するものとしたが、そうではなくて、この大開牙は牙關不開と相対した表現であり、[o]は[u]よりも広いという意味にとったほうが自然であるという。もしもoが[o]であったとして、これを反切で表記するのであるならば下字に固を使用するのではなく、豪皓號韻のいずれかの字を使用したであろうともいう。なお、唐末より梵音のboを號韻の冒で表記するようになるという事実については、当時すでに菩などの模韻が[o]から[u]に変化しており[o]はなかったため、號韻の冒を使ったのであり、それがいちばんboの音に近かった。イコールではないとした。

また唐氏は、梵音oを古代では「開o】【[o]】で読んだ。そのことは西洋の学者の説を引くまでもないとしたわけであるが、これにたいして、慶谷先生は、Allen氏がClassical Sanskritでoを[o:]とする説およびMacdonell氏がVedic Sanskritでoを[o]とする説を紹介する²。以上により、慶谷先生は、梵音oの音価を[o]とし、その音訳に使用された六朝の模（姥暮）韻も[o]であったとするほうが自然ではなかろうかとした。

上記は吉池のノートによるものであるが、発言の順序は上に記したとおりではなく、理解の便宜のために前後を入れ替えたところがある。また、慶谷先生の発言および板書のみを記したつもりであるが、あるいは参加した院生の発言を、先生の発言と取り違えているところがあるかもしれない。ご叱正を請う。

参考文献

Allen, W. S. (1953) *Phonetics in ancient India*. London: Oxford University Press.

唐鉞(1966)「歌戈魚虞模古讀管見」『國故新探』台北：台湾商務印書館。4版1970年。

Macdonell, A. A. (1910) *Vedic grammar*. 名著普及会1977による。

¹ 蘇州音については、当時院生であった故鈴木勝則氏が『漢語方音字彙』により[æ]と指摘。

² Allen(1953)によると20頁に音声記号として“Long o”とある。Macdonell氏については、文献の提示はなかったが、Macdonell(1910)とすると6頁にローマ字oの注記として“o”とある。もともと、両文献ともに[o]と[o]の違いを明示した上での注記ではない。